

【書評】

原田智仁・關 浩和・二井正浩編著

「教科教育学研究の可能性を求めて」

(風間書房, 2017年刊, 334頁) 3,800円+税

馬野範雄

(関西福祉科学大学)

本書の構成は、次の通りである。

はじめに

第Ⅰ章 教科教育において育成すべき資質・能力

第1節 説明的文章の批判的読みの授業づくり
の初期段階における要点

第2節 歴史系教科において育成すべき資質・
能力の設定に向けて

第3節 社会科のコンピテンシーと歴史教育

第4節 高等学校における歴史リテラシー育成
の試み

第5節 資質・能力を直接育成する公民授業実
践の在り方

第6節 科学的リテラシーとしてのアーギュメ
ント構成能力の育成

第7節 非言語コミュニケーションの教育とし
ての学校体育の意義

第Ⅱ章 教科教育学研究のストラテジー

第1節 社会科授業研究の理論

第2節 社会的な見方・考え方の一つとしての
スケール

第3節 歴史教育と重層的アイデンティティの
育成

第4節 社会科教育による社会的レリバンスの
構築

第5節 [デス・エデュケーション] としての
美術教育研究序説

第6節 質的評価の力量としての鑑識眼の意義
と新たな可能性

第7節 社会科教育におけるソーシャル・キャ
ピタル（社会関係資本）価値観育成

第Ⅲ章 教科教育の本質に迫る授業研究

第1節 理論批判学習の射程

第2節 小学校中学年社会科における多文化的
歴史教育の授業開発

第3節 ヒストリー・リテラシーを意識した高
校世界史授業

第4節 社会科におけるアクティブ・ラーニン
グの可能性

第5節 数学的表現とメタ認知を育てる算数科
の授業づくり

第6節 音楽的感覚の育成を基盤とした音楽表
現活動の指導

第7節 小学校英語教育における音声指導の課
題と展望

第IV章 教科教育におけるカリキュラム・マネジ
メント

第1節 社会科の本質に迫るカリキュラム・マ
ネジメント

第2節 社会科カリキュラムマネジメントを支
える研究方法論の諸相

第3節 世界史教育における内容編成の展望

第4節 若者の政治参加と主権者教育としての
社会科の役割

第V章 教科教育学研究のための教師教育

第1節 小学校教師を自立と創造へと導く社会
科現職研修の進め方

第2節 教員養成教育における社会科授業力形
成

第3節 社会科教師を育てる教師教育者の専門
性開発

第4節 美術と人間形成

終章 教科教育学研究の課題と展望

—社会科教育実践学を事例にして—

第1節 現状をどう受け止めるか

第2節 混沌を生む背景・要因は何か

第3節 有効なパラダイムとは

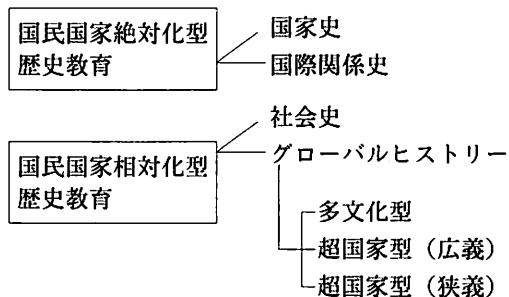
第4節 社会科教育開発研究に向けて

第5節 社会科教育開発研究の要件
おわりに

以上のように、30名の研究者が300ページにわたりてそれぞれの分野・領域から知見を述べている。教科は社会科を中心に、国語・算数・英語・音楽・美術・体育と多岐にわたり、校種も小学校から高等学校まで多様である。改めて教科教育を通して児童・生徒にどのような資質・能力を育成しようとしているのか、どのような方策を用いて授業開発・授業実践に向かおうとしているのか、考えるきっかけを与えてくれる。さらには教科教育を通したカリキュラム・マネジメント、教師教育へと研究対象は広がっていく。教科教育の研究者から見た学校教育の現状や課題、研究・実践の方向性を考えていく上で、貴重な示唆を提供してくれる一冊といえる。

各章や各執筆者の内容を紹介するのは紙面の関係で難しいので、ここでは、編著者の3名の提言を紹介することにする。

二井氏は、第Ⅱ章 教科教育学研究のストラテジーの第3節で歴史教育におけるアイデンティティに焦点を当てて論述している。そこでは、歴史教育が「ナショナルなレベルのアイデンティティに収束する傾向が強い」ことを課題としてあげ、国民国家を相対化する「グローバルヒストリー」の実践を紹介し、歴史教育で培われるアイデンティティを次のように整理している。



国民国家相対化型歴史教育の研究成果を生かし、今後、社会史教育、グローバルヒストリー教育のより魅力的なカリキュラムと授業を開発することが、重層的なアイデンティティやグローバルアイデンティティの育成を保障する歴史教育の可能性を拓くことになるとしている。

關氏は、第IV章 教科教育におけるカリキュラム・マネジメントの第1節で、「R-PDCA サイク

ル」「情報ネットワーク」「アクティブな学び」に焦点をあて、社会科のカリキュラム・マネジメントを提案している。まず学校の特色をとらえるために、SWOT（強み・弱み・機会・脅威）分析を紹介している。そして地域の特色を情報ネットワークとして活用し、知識を共有化していくプロセスがカリキュラム・マネジメントであるととらえ、「R-PDCA サイクル」に基づいた社会科におけるカリキュラム・マネジメントの全体像を提示している。さらに、小学校4年「ごみのしまつ」の単元デザインとともに、①現状分析と問題発見、②問題の分析・追究 ③価値判断・未来予測という探究学習に自己省察を組み込んだ「アクティブに学ぶ社会科授業の基本的なフロー」を提案している。

原田氏は、終章 教科教育学研究の課題と展望において、現在最も信頼しうる社会科教育学研究のパラダイムとして、次のような草原氏の類型を紹介している。

A: 常識的教科教育実践研究

A1: 教科教育臨床 A2: 教科教育運動

B: 科学的教科教育実践研究

B1: 教科教育分析 B2: 教科教育開発

そして、AからBへ、さらにB1からB2へ向かうことが、社会科教育実践研究の科学化へつながるとしている。

さらに、中本氏と二井氏の社会科教育開発研究を例に挙げ、両氏に共通する手立てを探り、次のような教科教育学研究の可能性を展望している。

- ①明確な授業理論を保持し、それを明示する。
- ②既成の常識的な見方に挑戦し、研究・実践上にインパクトを与える。
- ③授業モデルないし学習材としてのモデル教科書を作成する。
- ④授業計画の作成と実践を通して、授業理論、授業モデルないし学習材の有効性を検証する。
- ⑤授業理論の検証は、客観的なデータを基にした分析的評価によって行われる。

「小・中・高の学校現場や教職大学院等に席を置く研究者には、授業モデルの試行・検証にこそ固有の研究領域が開かれるのではないか」という編著者の意図が伝わってくる一冊である。